

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2012 年 11 月 25 日

派遣者氏名（専門分野）	安藤（宮脇） 麻貴 （ フランス文学 ）
-------------	----------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	カミュの文学作品における「追放」の表象とその生成過程
-------	----------------------------

派遣期間

2012 年 8 月 30 日 ～ 2012 年 10 月 29 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	エクサンプロヴァンス	アルベール・カミュ資料センター	Marcelle Mahasela
	フランス	パリ	フランス国立図書館	Marie-Thérèse Blondeau

派遣先で実施した研究内容

本調査は、カミュの文学において重要なテーマである「追放」の表象が、決定稿に至るまでにどのような過程を経て創造されたのかを、草稿、タイプ原稿、校正刷り等の資料を参照して、明らかにすることを目的とした。アルベール・カミュ資料センターでは、カミュが明確に「審判と追放のテーマ」をめぐる作品として創作した小説『転落』（1956）と短編集『追放と王国』（1957）のアヴァンテキスト（決定稿以前のテキスト）を調査した。特に、最も関心のあった、『追放と王国』については、その膨大な資料のほとんどに目を通し、可能な限り、ヴァリエーション（異本、異文）を転記した。草稿のオリジナルは、残念ながら参照できないが、断片的な創作メモや、タイプ原稿の修正は、直筆を参照できるものも多かった。なかには、2008年に刊行されたプレイヤーード新版に掲載されていないが、「追放」のテーマとの関連で興味深いヴァリエーションも目にする事ができた。なお、『追放と王国』に収録される前に、単独で少数部出版された作品「不貞の女」については、その版をフランス国立図書館ミッテラン館の貴重本閲覧室にて参照した。この版限定の挿絵を目にし、また、最終的に短編集に収録されるテキストとは異なる箇所を複数確認した。

カミュ資料センターではそのほか、「追放」をテーマとする作品群に続く、遺作となった『最初の人間』の草稿のコピー、『追放と王国』のまとまったプランがはじめて現れる、創作手帖（「第7ノート」）のタイプ原稿も閲覧した。

フランス国立図書館のリシュリュー館では、戯曲『戒厳令』（1948年上演）の資料調査を行った。この戯曲は、全体主義体制を寓意的に描き、人間の自由と権利が奪われる「追放」状態にある町が舞台となっており、また、もともと演出家のジャン＝ルイ・バローによって発案されたという特殊な経緯をもつ作品である。バローがこの戯曲の創作において及ぼした影響を具体的に調べるため、バローとカミュの直筆の大学ノート（同じノートに書いてあるもの）、バローの創作ノート、カミュの草稿（様々な紙片に書かれたもの）、バローが書いた第一幕のタイプ原稿等を閲覧した。これらの資料は、幸運にも、全てオリジナルを参照することができた。プレイヤーード新版にもそれらの内容はほとんど掲載されていないため、興味深いと思われる部分は、全て転記した。バローは、カミュに台詞を書くよう依頼した段階で、予想以上に多くのテキストを執筆していたことが判明し、この戯曲の複雑な成り立ちを窺い知るに十分であった。

文献調査以外に、カミュ研究者の二つの集いに参加した。ひとつは、パリのカフェ「プロコップ」で定期的に行われるカミュ研究者の集まりで、カミュ学会会長のアニエス・スピケル氏による、1930年代のアルジェでのカミュの活動についての講演を拝聴した。10月半ばには、カミュが晩年を過ごした、エクサンプロヴァンス近郊のルールマランで行われた学会に出席した。毎年行われるこの学会の今回のテーマは、カミュと演劇（性）についてであり、戯曲『戒厳令』について考える上でも示唆的であっただけではなく、一線で活躍する研究者と交流する貴重な機会を得た。

また、『ペスト』の草稿研究の第一人者であるマリー＝テレーズ・ブロンドー氏と個人的に面談し、草稿についてのみならず、研究テーマについて、さまざまな教示を得た。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究の第一の目的は、カミュ後期の「追放」をテーマとする作品群の草稿やタイプ原稿を調査し、「追放」の表象を解釈する上での新たな視点を獲得すること（もしくは、解釈の根拠となる要素を見出すこと）であった。『追放と王国』の調査を進めるなかで、フランス人である主人公にとっての「他者」、すなわち、アラブ人やブラジル人など、現地の人間を描く際、作家が実に入念に修正を繰り返していることに気付かされた。独立運動の気運が高まる祖国アルジェリアでの緊張状態の中で、アラブ人をいかに描くか、逡巡する様子が、作品の生成過程からよく伝わってきた。未知の場所に孤独に身を置く主人公が、現地の人間といかに出会い、交流するか、という問題は、『追放と王国』のあとで執筆された『最初の人間』で描かれるフランス人入植者とアラブ人との関係につながる。「他者」の描写の重要性は、今回の調査で、プレイヤード版にも掲載されていないヴァリエーションを含めて自ら生成過程を辿ることにより、明らかにできたことであり、今後、『追放と王国』を解釈する上で、掘り下げて検討したい。

「追放」をテーマとする作品群に含まれる『転落』については、当初の予定どおり、風景描写に着目して調査を行った。特に、はじめは存在していなかった、ギリシャに関する記述が、おそらくは作者のギリシャ旅行以後に、加筆されていること、その加筆により、どのように本文を再構成しているのかを調べた。そもそも、この作品の舞台であるアムステルダムも、作者のオランダ旅行の体験を基にしている。『追放と王国』の複数の短編も、アルジェリアの内地やブラジルへの旅行を素地にしていることを加味すると、旅行という、いわば「追放」状態に身を置くことが、作品の生成へとつながる、という視点も興味深いと思われた。

『追放と王国』のあとに執筆された、遺作『最初の人間』の草稿調査（オリジナルは閲覧不可）も、時間的には限られていたが、敢行した。作家の事故死によって、草稿のみが残されているこの作品が、どのような形で執筆されているのか、削除や修正がどの程度行われているのか、余白への書き込みの仕方などを全般的に確かめた。草稿に数多く見られる加筆や削除の跡は、プレイヤード版のテキスト及び注に必ずしも反映されていないことを知った。草稿を忠実に再現する「転写」がこれまで刊行されていないため、この作品の草稿を見られたことは、きわめて有意義な体験であった。

後期の作品の調査に加えて、今回の調査のもう一つの大きな目的は、先述のとおり、戯曲『戒厳令』の創作におけるジャン＝ルイ・バローの影響を明らかにすることであった。ダニエル・デフォーの『ペスト』の読書ノート、作品全体のプラン、第一幕の草案のタイプ化など、バローがこの戯曲について残した数多くの資料を閲覧して、作品内の様々な要素について、バローの案が採り入れられていることを確認した。バローの着想が、カミュの創作に及ぼした影響を綿密に分析するには、バローの資料の量からして、今回の調査では限界があったが、しかし、当初から着目していた舞台設定については、カミュがいかに独自の考えによって発展させているか、具体的な情報を得ることができた。転記した資料をこれから詳しく分析すれば、特に第一幕については、バローの影響を細かに指摘することができるであろう。日本では見ることのできない初演時の写真や舞台装置の素描を目にすることができたことも、この戯曲を読む上で非常に参考になった。

## 派遣後の研究発表の予定

- 2013 年日本カミュ研究会例会にて口頭発表予定。
- 2014 年刊行の *Présence d'Albert Camus* (国際カミュ学会、本部フランス) に寄稿予定 (フランス語で執筆)。
- 2014 年刊行の『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会) に寄稿予定 (フランス語で執筆)。